

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所
2022 年度フィールネット・ラウンジ企画 ワークショップ

不確実性と対話する人類学：法律・経済・芸術・宗教の現場から
**The Anthropology of Uncertainty: From the Field of Law, Economics, Art, and
Religion**
実施報告書

企画責任者：張詩雋（北京大学）

アドバイザー：田中雅一（国際ファッション専門職大学）

日時：2023 年 3 月 11 月（土）13:00～18:00（オンライン開催）

主催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）

図 1 研究会ポスター

2022年度フィールドネット・ラウンジワークショップ企画

2023.3.11 | 土 |

13:00 ▶ 18:00 (12:45 開場) **参加費 無料**

ZOOM によるオンライン開催

 ◀ 事前に左のフォームからご登録をお願い致します。
[https://us02web.zoom.us/meeting/register/tZlqce6gpjorGtEXm1F0dyxJXUhyckQqW](https://us02web.zoom.us/join/https://us02web.zoom.us/meeting/register/tZlqce6gpjorGtEXm1F0dyxJXUhyckQqW)
登録締切 2023年 3月10日(金) 正午

不確定性

対話する人類学

法律・経済・芸術・宗教の現場から

要旨

本研究会の目的は、法律、経済、芸術、宗教といった領域から、現地調査をもとに「不確定性 (uncertainty)」という概念と対話し、日々変化する確実性なき現代社会に新しい解釈を提供することです。身体・言語・倫理といったミクロのレベルから不確定性を検討する A・アバドゥライの『不確定性の人類学』(2020年、原著は 2016年)の視点を共有し、裁判、賭け事、芸術品の競売、宗教実践について調査を行う若手研究者が発表します。また、人類学の多様な視点から現代社会の不確定性を検討し、理解を深めることを目指します。そのうえで人類学者の岸上伸啓氏(国立民族学博物館)、中川理氏(国立民族学博物館)、田中雅一氏(国際ファッション専門職大学)をコメンテーターに招き、議論を行います。

プログラム

13:00-13:05 フィールドネットからの挨拶
13:05-13:15 趣旨説明
13:15-13:45 永井 文也(専攻学術大学 助教)
権利の確実性を取り替く不確定性
—カナダ西部における先住民の権利をめぐる交渉と和解を事例に
13:45-13:50 質疑応答
13:50-14:20 劉 振業(京都大学大学院 博士課程)
不確定性との対話から排除される
—マカオのカジノにおける東南アジア労働者(「外資」)の事例から
14:20-14:25 質疑応答
..... 10分休憩

14:35-15:05 張 詩雋(北京大学 PD 研究員)
確実さなき北京芸術市場
—オークション・ハウスの競売活動を事例に
15:05-15:10 質疑応答
15:10-15:40 川本 直美(岡山大学 客員研究員)
聖なる存在と名前
—メキシコ西部村落における聖像への呼びかけの実践から
15:40-15:45 質疑応答
..... 10分休憩

15:55-16:15 コメント1 岸上 伸啓(国立民族学博物館 教授)
16:15-16:35 コメント2 中川 理(国立民族学博物館 准教授)
16:35-16:55 コメント3 田中 雅一(国際ファッション専門職大学 副学長
京都大学 名誉教授)

16:55-17:55 総合討論
17:55-18:00 閉会の辞

共 催 ▶ 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
東京外国語大学フィールドサイエンスcommonsTUFISCO

お問い合わせ ▶ 張 詩雋(企画責任者) shijun.z[at]outlook.com
※ [at]を@に変更してご連絡ください。

プログラム

- 13:00～13:05 開会の辞：フィールドネットからの挨拶
- 13:05～13:15 趣旨説明：「不確実性と対話する人類学—法律、経済、芸術、宗教の現場から」
張詩雋（北京大学）
- 13:15～13:45 永井文也（恵泉女学園大学 助教）
権利の確定性を取り巻く不確実性—カナダ西部における先住民族の権利をめぐる交渉と和解を事例に
- 13:45～13:50 質疑応答
- 13:50～14:20 劉振業（京都大学大学院 博士課程）
不確実性との対話から排除される—マカオのカジノにおける東南アジア人労働者（「外^{オイロウ}労」）の事例から
- 14:20～14:25 質疑応答
- 14:25～14:35 休憩①
- 14:35～15:05 張詩雋（北京大学社会学系 PD）
確実さなき北京芸術市場—オークション・ハウスの競売活動を事例に
- 15:05～15:10 質疑応答
- 15:10～15:40 川本直美（岡山大学文明動態学研究所 客員研究員）
聖なる存在と名前—メキシコ西部村落における聖像への呼びかけの実践から
- 15:40～15:45 質疑応答
- 15:45～15:55 休憩②
- 15:55～16:15 コメント 1：岸上伸啓（国立民族学博物館 教授）
- 16:15～16:35 コメント 2：中川理（国立民族学博物館 准教授）
- 16:35～16:55 コメント 3：田中雅一（国際ファッション専門職大学 副学長 京都大学 名誉教授）
- 16:55～17:55 総合討論
- 17:55～18:00 閉会の辞

Programme

- 13:00~13:05 Greetings from Fieldnet Lounge
- 13:05~13:15 Opening Remarks from Zhang Shijun (PD, Peking University)
The Anthropology of Uncertainty
- 13:15~13:45 Nagai Fumiya (Assistant Professor, Keisen University)
Uncertainty over Certainty of Rights: A Case Study on Negotiations and Reconciliation related to Aboriginal Rights in Western Canada
- 13:45~13:50 Questions and Answers
- 13:50~14:20 Liu Zhenye (PhD Candidate, Kyoto University)
Excluded from the Dialogue of Uncertainty: The Case of Guest Workers from Southeast Asia in Macau Casinos
- 14:20~14:25 Questions and Answers
- 14:25~14:35 Break 1
- 14:35~15:05 Zhang Shijun (PD, Peking University)
Uncertain Beijing Art Market: A Case Study on the Auction Activities
- 15:05~15:10 Questions and Answers
- 15:10~15:40 Kawamoto Naomi (Visiting Researcher , Okayama University)
The Sacred and His Names: A Case of an Image of Child Jesus in a Mexican Village
- 15:40~15:45 Questions and Answers
- 15:45~15:55 Break 2
- 15:55 ~ 16:15 Commentary 1 : Kishigami Nobuhiro (Professor, National Museum of Ethnology)
- 16:15~16:35 Commentary 2 : Nakagawa Osamu (Associate Professor, National Museum of Ethnology)
- 16:35~16:55 Commentary 3 : Tanaka Masakazu (Vice President, Professional Institute of International Fashion, Professor Emeritus, Kyoto University)
- 16:55~17:55 Discussion
- 17:55~18:00 Ending Remarks

趣旨説明

本研究会の目的は、法律、経済、芸術、宗教といった領域から、現地調査をもとに「不確実性 (uncertainty)」という概念と対話し、日々変化する不確実な現代社会に新しい解釈を提供することである。

不確実性という語は、近年になって異なる学問分野において様々な意味合いで使用されており、共通の定義は未だなされていない。小畑二郎は、マクロ経済学の祖、M・ケインズ思想を考察する著書のなかで、不確実性には主に3つの使われ方があると指摘した。すなわち①法学・政治学における不確実性とは、紛争、戦争などの社会運動・変化が引き起こした社会的不安・危険な状態を指す、②経済学における不確実性とは、近代経済学の発展の動機であり、近代的通貨制度の発展に大きく関係するものである、そして③倫理的な不確実性とは、人間の存在自体を問う懐疑主義的パースペクティブを意味する [小畑 2007:234-5]。

以上の3つの視点を共有しながら人類学、とりわけ生態人類学、経済人類学、医療人類学などの領域において、不確実性はより多様な意味合いで考察されてきた。たとえば、生態人類学が注目する自然の不確実性は、原初の自然の動態性を意味する。当該分野の主な調査対象の狩猟採集民や漁労民は、自然を相手に生業を行うため、常に自然の不確実性に向き合う必要がある。それゆえ、彼らは自然の不確実性の存在を十分に意識して生業形態を構築する。それを丹念に描き出すのが生態人類学である。経済人類学は、原初の自然だけでなく、社会、市場という人工的な環境の中で生じる不確実性に着目し、リスクの代名詞としての不確実性や、それを回避するための人々の認識、意識、商習慣の構築を考察した。呪術論や医療人類学では、人間が遭遇する不具合を一種の不確実的な状態としてとらえ、この不確実な状態を解釈・合理化する過程を考察する [市野澤 2014:10-12]。

不確実性に関して多様な考察がなされるなか、本発表ではA・アパドゥライの『不確実性の人類学』(2020 (2016))に着目する。米国やインドの金融市場が孕む不確実性について先物取引を通して考察するアパドゥライの研究は、現代における巨大な金融装置は、取引の不確実性やリスクを管理するのではなく、それを利用して金儲けすることによって、大きな金融危機に導いたことを批判的に考察した。アパドゥライはM・ウェーバー (M. Weber 2009 (1905)) との対話を通じて、金融・経済における危機と倫理面の欠陥との関係性を論じている。とりわけ、不確実性を検討する際、身体・言語の役割に注目する。

この身体・言語・倫理といったミクロのレベルから不確実性を検討する視点を共有

し、本研究会では、法律裁判、賭け事、芸術品の競売、宗教実践について調査を行う若手研究者が発表した。そのうえで人類学者の立場から岸上伸啓氏（国立民族学博物館）、中川理氏（国立民族学博物館）、田中雅一氏（国際ファッション専門職大学）をコメンテーターに招き、議論を行うことによって、人類学の多様な視点から現代社会の不確実性を検討し、理解を深めた。

<参照文献>

A・アパドゥライ、2020（2016）、『不確実性の人類学—デリバティブ金融時代の言語の失敗』、中川理他訳、以文社。

J・ガルブレイス、1978、『不確実性の時代』、都留重人訳、TBS ブリタニカ。

市野澤潤平、2014、「リスクの相貌を描く—人類学者による「リスク社会」再考」『リスクの人類学—不確実な世界を生きる』、東賢太郎他編、1-27、世界思想社。

小畑二郎、2007、『ケインズ思想—不確実性の倫理と貨幣・資本政策』、慶應義塾大学出版会。

Weber, Max 2009(1905), *The Protestant Ethic and Spirit of Capitalism*. Translated by Stephen Kalberg. Oxford: Oxford University Press.

Abstract

The purpose of this workshop is to engage in a dialogue about the concept of “uncertainty” based on field research relating to law, economics, art, and religion, and to offer a new interpretation on the rapidly evolving and uncertain world of today.

In recent years, the term “uncertainty” has been used with various meanings in different academic fields. In this session, we will concentrate on Arjun Appadurai’s *Banking on Words*(2016) which is translated as “The Anthropology of Uncertainty (不確実性の人類学)” (2020) in Japanese. This incisive book, which investigates the uncertainty inherent in the U.S. and Indian financial markets through futures trading, critically examines how the massive financial apparatus of our time has led to major financial crises, not by regulating the uncertainty and risk of transactions, but rather by exploiting them to make money. Through a theoretical conversation with Max Weber, Appadurai analyses the link between financial and economic crises and ethical flaws. In particular, he focuses on how the body and language relate to the uncertainty of the financial markets. Sharing this perspective of examining uncertainty from the micro level of the body, language, and ethics, four young researchers working on lawsuits in Canada, gambling in Macao, art auctions in Beijing, and ritual in Mexico will present on this workshop. Further, by adopting a variety of anthropological perspectives from anthropologists such as Kishigami, Tanaka, as well as the Japanese version translator of Appadurai’s book, Nakagawa, we aim to deepen our understanding of uncertainty in contemporary society.

発表要旨

発表1：権利の確定性を取り巻く不確実性—カナダ西部における先住民族の権利をめぐる交渉と和解を事例に

永井文也（恵泉女学園大学）

永井の発表は、カナダ西部における先住民族の権利をめぐる交渉と和解について検討した。カナダでは、和解を目的の1つに先住民族と州・連邦政府の間で、条約締結や裁判などを通じた権利をめぐる交渉が行われてきている。ここでは、資源利用や開発事業などの関連からその権利内容の確定性が一方では求められてきた。しかし、同時に国際市場や資本の流動性などを背景として不確実性も内在する。本発表ではこうした特徴に着目しながら、カナダ西部の土地に関する権利の交渉と和解のあり方を中心に、権利の確定性を取り巻く不確実性に対する検討を加えた。

発表2：不確実性との対話から排除される—マカオのカジノにおける東南アジア人労働者（「外^{オイロウ}労」）の事例から

劉振業（京都大学大学院）

劉の発表は中国・マカオの賭け事に注目した。劉によると、ベットまたは予想という行為によって誰でもギャンブルの不確実性と対話することができる。しかし、実際のギャンブル実践では、東南アジア出身の外国人労働者はその対話から排除されている。それは中国人ギャンブラーがギャンブルの不確実性に対処する際に用いる思考＝命理信仰では、命理が身体に内在化されているという思考のもと、「汚穢」とされる身体と命理をもつとみなされる東南アジア出身者は、不確実性の秩序の清浄さを維持するために排除される必要があると考えられているためである。劉の発表では、マカオのカジノにおけるギャンブル実践の事例から、東南アジア人の身体によるエスニシティの違いで生まれる、ギャンブルの不確実性の分断について考察した。

発表3：確実さなき北京芸術市場—オークション・ハウスの競売活動を事例に

張詩雋（北京大学）

張の発表は、中国北京の芸術市場を対象とし、競売に関わる不確実性に着目した。張によると、北京の芸術品の競売は、競売行為に内在する不確実性だけでなく、関連政策実行上の不具合やコロナのような偶発的な事象からも影響を受けている。そのなかで張は競売に向けて行われる宣伝に使用される言語や、競売現場の雰囲気、競売人の

語りや仕草に重点をおきながら考察を行った。芸術品が高額で落札されるのは、オークション現場におけるモノのエージェンシーや人の行為の共同作用で形成する集合的な沸騰状態によるものということを今回の発表で明らかにした。

発表4：聖なる存在と名前－メキシコ西部村落における聖像への呼びかけの実践から
川本直美（岡山大学文明動態学研究所）

川本の発表は、メキシコ西部村落における聖像への呼びかけの実践について考察した。メキシコ、ミチョアカン州の一村落では、毎年実施されているカトリックの祭礼が、時の在村司祭との関係次第では変容を余儀なくされることがある。定められた人（神父）が定められた日に形式的な所作で行うミサとは異なり、ある種の不安定さを抱えながら人々はいかにして神との関係を結んでいるのか、特に聖像というモノとの関わりを川本の発表は検討した。

議論と今後の課題¹

2022年度フィールドネット・ラウンジ企画として、ワークショップ「不確実性と対話する人類学」が2023年3月11日の13時からオンラインで開催され、一般参加者も含め44名が参加した。当日はまず永井、劉、張、川本がそれぞれ発表を行い、その後コメンテーターの岸上、中川、田中の各氏がコメントや質問をした。

まず岸上は、自身が長年調査を行ってきたイヌイト社会が抱える2種類の不確実性を解説した。1つ目の不確実性は自然が孕む不確実性であり、イヌイト社会だけでなく、伝統的な生業を営む社会が共有するものである。イヌイト社会のような狩猟民社会では、実質均等という原則のもとで食物分配を行い、自然の不確実性を共有・分担するが、農耕社会は食物を貯蔵することで自然の不確実性に備える。そして2つ目の不確実性は現代社会による不確実性である。これは近代的な生産活動によって加速する気候変動が伝統社会や伝統生業に与える影響を意味する。

さらに岸上は不確実性とは常に他者（ほかの人間、または人間でないモノ）との関係性の中で存在することを指摘した。今回の発表内容で考えると、永井の発表では不確実性は先住民と国家との関係の中にあり、劉の発表ではマカオ・カジノの人々と外来労働者との関係の中にある。張の発表ではオークションの関係者、職員、来客との関係の中にあり、川本の発表ではメキシコのある村のカトリック住民たちや来訪者と幼子イエスの関係性の中に存在する。岸上は最後に、不確実性はあらゆる物事に付随するため、この概念に焦点を当てる際、いかなる学問的・実践的な意味を想像したのか、またこの不確実性を通して何がわかったのかと4人の発表者に質問した。

岸上につづいて、アパドゥライ著『不確実性の人類学』の訳者の一人である中川は、まず近年の日本の人類学界において不確実性が注目されていることの原因について分析した。中川によると、不確実性が多く注目されるのは、アパドゥライをはじめとした研究者らが提起した問題意識に関連する。また不確実性という概念をいかにポジティブに捉え、それを元にいかにして新しいことを生み出すのかということにも関係している。アパドゥライの研究で示されたように、リスクをいかに定量化したとしても、結局トレーダーたちは先物の不確実性にかけてしまった。金融市場においても、日々変化する現代社会においても、我々は不確実性をなくすよりいかにしてそこから新しいものを生み出すかを考えるべきだとコメントをした。中川も岸上と同じく、発表者たちはこの不確実性という概念を通して何か新しいことがわかったのかと質問した。

¹ 敬称略。

3 番目のコメーターはワークショップのアドバイザーも務めた田中である。田中は宗教研究の視点から集合的沸騰状態や遡行的パフォーマンスをキーワードにして、4 人の発表内容について意見を述べた。田中はまずイギリス人類学者の H. Whitehouse の儀礼研究について紹介した。Whitehouse によると、儀式は (1) 低頻度・高喚起型 (通過儀礼、王室・国家儀礼、千年王国カルトなどが典型例) と (2) 高頻度・低喚起型 (典礼儀礼、祝福、贖罪儀礼など) に大別される傾向がある。(1) には集合的沸騰状態、反構造的なモードに入ることによって新しい秩序が生まれる。すなわち不確実な状態から新しいことを生み出す。それに対して (2) は不確実性がないような実践に見えるが、遡行的パフォーマンスを導入することで、儀礼が依拠する教義は、少しずつ修正される。このように宗教儀礼の主体への視点は、本日の発表者の内容にも関係するとコメントした。

総合討論では、まず発表者はコメントや質問に対してリプライを行った。とりわけ不確実性に焦点を当てる際、いかなる学問的・実践的な意味を想像したのか、またこの不確実性を通して何がわかったのか、次にいかなることを目指すのかといった質問に対して、4 人の発表者は次のように答えた。

まず川本は、不確実性を通してこのカトリックの村の宗教儀礼を考察することによって、日常的に人々と像とのかかわりがあれば、教会の権威と信徒の不和がもたらす不確実性を乗り越えていけることがわかったと述べた。そして今後の課題としては、司祭と信者が不安定な関係にあったとしても儀礼以外の振る舞いを検討することで、信仰の対象が徐々に変化していく可能性をさぐることを挙げた。

つづいて永井は不確実性の普遍性をまず認めた。それをカナダの先住民族が裁判を起す文脈で考えてみると、人々は権力をめぐる交渉の中では確実性、確定性をもとめていたことに気づいたという。それではそれは果たしてどのような意味をもつのか、というところに永井は疑問を感じ、不確実性という概念を通して彼らの実践を見直すことにこの概念を使用する意義を見出している。今回の発表を通して、先住民の側は確実性に対して強い希望や執着をもち、そして彼らはいかに裁判の中で確定性を作っていたかとしていたかを改めて認識した。永井は先住民族の土地に関する権利はいかにして多様なシステムのなかで分配され、認識されていくのかを今後の課題として検討すると述べた。

永井につづいてリプライを行った劉によると、不確実性という概念を使うことによって、ギャンブルに関わる人々が結ぶ関係の不安定さを改めて認識したという。この点は今までのギャンブル研究やリスク研究の中であまり考察されていない点でもある。そして今後の課題として、ギャンブルに関わる人々の身体レベルから彼らの実践

を考察し、ギャンプルによって生まれる関係性の構造も検討したいと述べた。

最後に張は、不確実性を問題にした理由について2点を述べた。まず1つ目の理由は、新型コロナ禍の3年間で改めて不確実性を実感し、新型コロナ禍のような世界中に影響を与える「ブラック・スワン」事象に対して、人類学的にいかなる回答や解釈を出せるかと考えたことである。2つ目の理由は自身の今までの研究経験に関係する。これまでの研究対象は伝統工芸にたずさわる人々である。無形文化財のブームの中で伝統と呼ばれるものは著しく注目されるが、この業界を生きる人々には貧富の差、社会的地位の差、作品の価格の差が存在する。少数の有名人を除き、多くの人は高いリスク、高い不確実性を抱えて伝統工芸を営んでいる。伝統工芸を含む芸術品の市場の不確実性を考察することによって、これまでの自身の研究に新たな視点を提供することにもなりうると考え、この概念を選んだ。

そしてこの概念を使って中国の芸術市場を考察してまずわかったのは、市場にかかわる多種多様な不確実性（新型コロナ禍への対処、国家の政策、競売行為の固有の特徴など）が色濃く存在することである。今回のコメントを聞いて、このような市場環境の中でも芸術品を取り扱う人たちは明白に、あるいはさりげなく一種の確実性を作っていることに気づいた。例えば商品に高値をつけるため、カタログを含む多様な宣伝メディアではあらかじめ決められた用語でそのよさを繰り返し紹介する。さらに競売の現場の写真や競売人の語りや仕草でそれを強化する。こうすることで芸術品に不条理な大金を使うという一見リスクの高い行為を、一種の合理的な経済行為と認識させている。今後の課題としては、芸術品の売買を言語や人々の身体とのかかわりに重点をおいて分析していきたいと述べた。

今回のワークショップでは、法律、経済、芸術、宗教といった異なる分野の対象に、文化人類学的な関心や理論からアプローチする4人の若手研究者がそれぞれの調査経験（カナダの原住民社会、中国マカオ、中国本土、メキシコの村）をもとに発表を行った。発表を通して、まず不確実性の普遍性とそれに対応・対処する手法や価値観の多様性が認識された。調査地や研究内容に相違があるからこそ多様な刺激をお互いに与えることができた。コメンテーターからはいかに理論的に不確実性を考察できるのかについてヒントをもらい、4人にとって各自の研究を新しい視点で見直す機会となった。

不確実性の普遍性から考えると、マクロな視点でそれを議論・定義することにはさほど意義がないかもしれない。ただ普遍的な不確実性に対する人間の対応は多様である。カナダの原住民はいかにして新しい権力を分配する仕方を生み出すのか。メキシ

コの人々は不安定さを抱えながらも教会や聖像とどのような関係を築くのか、マカオの人々はいかにして生活の不確実性を乗り越えるのか、さらに芸術品のオークションではいかにして不確実性を確実性に変え、頑固に努力するのか。不確実性という概念を意味論的に考えるのではなく、言語、身体、日常生活というミクロな視点で考察するからこそ意義があり、魅力がある。

「不確実性と対話する人類学」というテーマは、本企画を第一歩として、今後もこの研究グループで定期的に研究会を行い、議論を深めていく予定である。そしてゆくゆくは論集の出版も視野に入れて活動を行いたい。

謝辞

フィールドネット・ラウンジ企画の公募制度によって本ワークショップは可能となりました。企画運営を行っている東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の皆様には感謝を申し上げます。特に本企画の採用後からワークショップ実施まで種々の手続きについてご対応いただきました事務局の千葉淑子様へ改めて感謝申し上げます。ありがとうございました。

また本ワークショップには、発表者とコメンテーター、オンライン参加者、合計して44名の方にご参加をいただきました。お忙しいところ本ワークショップにご参加くださり、誠にありがとうございました。